



■ 撮影者 匿名

公募写真テーマ「チャレンジ」

東伊那の「竹でミニ門松づくり」に参加した際の一枚です。初めての制作にチャレンジして作った自作の門松。それをお家に飾って迎えたお正月は、新しい一年の良いスタートになりました。

※今号の表紙写真は応募いただいた写真を使用しています。

次号 館報「駒ヶ根」175号

表紙写真募集中!

次号よりテーマの制限を設けず、幅広く作品を募集いたします。皆様の力作をお待ちしております。

詳細は申込フォームをご覧ください。各公民館へお問い合わせください。

※申込締切は令和8年5月8日(金)まで



地域に根ざした防犯活動

『電話でお金詐欺』など近年は犯罪も多様化してニュースで見ない日はないほどです。身近な脅威となっている各種犯罪に警鐘を鳴らし、市民の防犯意識を高める活動を続けている駒ヶ根警察署管内の防犯団体をご存じでしょうか。

1954年『伊南防犯協会』として発足し、1996年独自に活動していた地域防犯協会等18団体が連合化し『伊南防犯連合会』が設立されました。

小中学生対象にわが家のセーフティーリーダー委嘱、防犯ポスター募集、下校時の見守り青色防犯パトロール。地域の女性有志で活動する『伊南防犯女性部』による詐欺等への注意を呼び掛ける街頭啓発活動、犯罪被害防止の水際対策グッズを作成・配布するなど地域に根ざして幅広い世代に届く防犯活動に取り組んでいます。

また、『電話でお金詐欺』の多発に伴い、より多くの人に詐欺手口を知ってもらおうと、2021年に駒ヶ根警察職員により音楽ユニット『コマガネ・サギストッパーズ』が結成され、音楽での啓発を行っています。2025年にはYouTubeで動画配信も開始、「電話でお金は詐欺〜♪」と覚えやすいフレーズとともに駒ヶ根の景勝地も紹介して記憶に残りやすいつくりになっています。

駒ヶ根警察署生活安全刑事課の北澤係長は、「“犯罪”は身近で起きて欲しくない・関係ない、と目をそらしがちですが、家族や友人と防犯について会話する機会をつくってもらいたいです。日頃から意識して兆候をつかむことが最大の防犯につながります。私たちはその手伝いをしていきたいです」さらに「普段の生活に防犯の視点を取り入れる『ながら防犯』は無理なくできる上、自分を守る視点も得られる活動(下記連合会QRコード参照)です。周囲の方と防犯を語るきっかけにしてください」と優しい笑顔で語ってくださいました。

防犯連合会の活動は、警察が「より身近で相談しやすい生活の相棒」となることにつながっていると感じました。



全国防犯協会連合会
「防犯ボランティアのすすめ」



コマガネ・サギ
ストッパーズ動画

五十鈴神社『マルわ』の由来

五十鈴神社の祭典は毎年9月23日に行われています。私は北割在住ですが、祭典に参加すると『マルわ』の豆絞りの手ぬぐいがもらえます。『マルわ』の由来は何なんだろうと疑問に思っていました。平成10年に大宮五十鈴神社総代会が作成した『わたしたちのお宮 大宮五十鈴神社』に記載がありましたので紹介したいと思います。



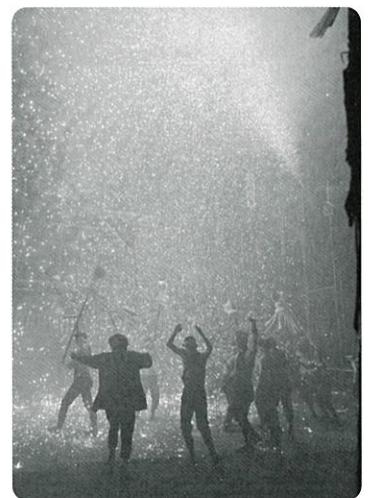
北割『マルわ』の豆絞り

元資料は昭和5年に編集された『上穂青年会沿革』に上穂青年会はもと上穂若連と称しており(1580年頃成立)、1617年(元和3年)に飯田城主となった脇坂安元侯が領地巡視のため上穂の安楽寺にご宿泊されたおり、ご宿泊所警護を行った若連に感謝し下付した蛇の目紋(マルの部分)と若連の紋(わ)を合わせて現在の『マルわ』の紋章を使用し始めたとあります。

現在は上穂、南割・中割、北割1区・2区が3年に1回交替で祭典をとりおこなっていますが、北割1区・2区は400年以上の伝統がある『マルわ』の紋章を使わせていただいていたんですね。あらためて、祭典を楽しんで次世代に渡していかなければと強く感じました。

神社の祭典は若連の最大の事業であり慰安でもあり、祭典の折には明治40年まで神社舞台において奉納演劇が催されていたそうです。明治41年以降は奉納煙火打ち上げに変わり、現在まで続いています。

補足ですが蛇の目紋とは弓矢を束ねて収納する弦巻が蛇の目に似ていることにより蛇の目紋と言われています。蛇が脱皮して成長する姿から復活と再生の象徴とされ厄除けや魔除けの文様として尊ばれ、幸運や健康を招く家紋として多くの家で使用されています。



令和7年度祭典 三国煙火

分館紹介 No.9

小町屋分館

2025年4月1日現在
2,482人
区加入世帯 1,056戸

小町屋分館では、今年度初の試みで赤穂公民館全館を借り切り、『小町屋区民ふれあい文化祭』を10月19日に開催いたしました。前年までの夏のふれあい広場、秋の文化祭は、それぞれに伝統や愛されてきた文化がありつつも、時代の変化や負担軽減等の課題もありました。そこで前年の役員の皆様の協力を得て『小町屋区民ふれあい文化祭』に集約する形で準備を進めてきました。

多くの区民の皆さんが楽しく参加することをコンセプトとし、海外協力隊コーナーをはじめキッチンカーや猿まわし、作品展示、



中曾倉読書会 一本で繋がる仲間一

毎月第一月曜日の午後、5人の仲間が地域の集会所に集まってくる。それぞれに何冊かの本を抱えて。その光景は60年余り前、昭和30年代から続いているのだそうだ。



読書会の様子

12月の会には98歳の竹村かね子さんを筆頭に80代の下平むつみさん、竹村民子さん、70代の宮脇佳代子さんが集った。本題の前、かね子さんが「いつもは4人でやる地区の落ち葉の掃除を、昨日は2人でやって大変だった」と話され、また「蕎麦の実をみんな猿に食べられた」と、むつみさんと民子さんがこともなげに話されるのに中曾倉の今が見える。

この日、みんなで読んだのは、信濃毎日新聞に連載された「今日の視角」を本にまとめた『心の書棚』（小倉和夫著）。一人が一遍ずつ音読して、みんなで気が付いたこと、感想、わからない表現などについて話し合う。今回の本は著者が元外交官で様々な国の話が出てくる。そのため世界地図を手に、国の位置がどこか確認しながら読んでいた。『日系人魂』のところでアメリカの議会制度に話題が及ぶと、元かっぱ館長の林九八さんが、助言者としてアメリカの上院、下院について簡単に説明していた。本の選定、図書館との繋ぎ役、また私物本の紹介貸出などもする助言者の存在が、会の運営には欠かせないようで、これまでも色々な方を助言者として迎えた。

また、みんなで回し読む本は小説やエッセイだけでなく、時には漫画『僕と大家さん』（矢部太郎著）なども手に取るそうだ。

持ち回りで当番が書く会の記録を拝見すると、折々に旅行やお花見、ランチ会なども楽しみながら読書を続けてきた会の様子が窺える。これからも知的であたたかな時間が長く続きますように。

東伊那区誌『峯高く』まもなく刊行

2020年6月に初の編集委員会を開いてから6年、苦心を重ねた区誌がいよいよ刊行されることになりました。刊行を前に、編集委員長を務めている福澤惣一さんに編さんの経緯や区誌の特色についてお話を伺いました。

東伊那でも区誌をとという声は前々からあり、2019年当時の公民館長・新井幸徳さんと話したことから具体的に became そうです。公募で編集委員を集め、どんな区誌にしたいかということから始まりました。小木曾伸一先生を監修者に迎え、中学生からでも楽しめる区誌にするにはどうしたらよいか話し合い、執筆分担を決めて進めてきました。長老の方々がお元気なうちにお話を聞き、昔を知る手掛かりにしたいとの願いから、執筆と並行して『昔の東伊那を語る会』と題して、地域の長老にお話を聞く会を定期的開催してきました。昔の東伊那に関わる今でなければ聞けない貴重なお話を伺うことができました。

『東伊那区誌編さん便り』で地域の皆さんに昔の資料の貸し出しをお願いし、様々な場面の写真や古文書が数多く寄せられました。区誌の名前も募集。2023年に『峯高く』に決まりました。

東伊那区誌『峯高く』は、①「序章・歴史・文化財・民族編」②「自然編」③「産業・行政・教育編」の3分冊。1冊約200ページで、全600ページ程になります。特徴は地域資料のデジタル化。地域で編さんされた区誌と県立図書館のデジタルアーカイブとの連携は、県内でも初めてのケースだと思います。単なる地域資料の閲覧にとどまらず、地域史研究の継続と更新も視野に入れています。デジタル化に詳しいボランティアの方々や南信工科短大の先生・学生ボランティアの皆さんのおかげで実現しました。

東伊那で初めて編さんされた区誌には、先人へのリスペクトと東伊那で生まれた地域文化への思いが含まれています。編集委員の地道な調査や執筆、地域住民



デジタル化に取り組む

をはじめ多方面からの様々な温かい支援を得て完成する『峯高く』を多くの皆様に手に取っていただきたいと願っています。問い合わせ先

東伊那公民館 (TEL.0265-82-4664)

健康コーナー、ステージ発表、ワークショップ等を詰め込んで、多くの方の参加を呼び掛けた結果、当初の目標の400名を超える方の来場があり大成功を収めることができました。

準備から関わっていただいた多くの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

来年度も区民の皆さんと笑顔でお会いできることを楽しみにしております。

小町屋分館長 氣賀澤 浩史

開拓集落南入の変遷

元中沢区誌編集委員 宮下一栄

南入について

南入は自然発生的にできた集落ではなく、開拓政策によって人工的にできた、中沢で一番新しい集落です。そして、中沢で一番最初に無くなってしまいう集落になるかもしれません。陣馬形山の麓に位置し、手前から大平、笹倉、キグタシの三つの谷により構成されています。

第二次大戦中には、小学生も動員され、木を切り栗やそばの栽培が試みられました。故北沢實さん（一九二五年生、菅沼出身）は、少年義勇隊として渡った満州から一九四六年に帰還、開拓農家として南入に入植しました。實さんの長男で、南入生まれ、南入育ちの和昭さんにお話を伺いました。

キグタシ開拓農業協同組合（一九四六～一九七二）

終戦後の一九四六年、国は食糧対策と海外からの引揚者、復員軍人、疎開者などの失業対策として、緊急開拓事業を実施しました。中沢村では南入の村有地と、買い上げた周辺の民有地とに十四戸が入植し、「キグタシ開拓農業協同組合」が発足しました。

食糧増産のための馬鈴薯栽培が猪の害で全滅したり、一九四九年には稲作も始まったものの、冷たい湧水での栽培では、収量は当たり五〜六俵と半作状態で、農業での生計は大変厳しく、多くの離農者がました。一九五〇年には五戸に減少しましたが、その後入植者は増え、一九五五年には満蒙開拓引揚者四戸、義勇隊帰還者一戸を含む十三戸となりました。

当初はランプによる生活でしたが、住民の強い熱意で、電力会社と共同作業により電柱を立て、一九五七年には、電気が通りました。

この頃から、北沢さんのお宅では乳牛一〜二頭による酪農を始めましたが、集乳車は南入まで来ず、二キロの山道を生乳を担いで出荷していました。

一九六三年には簡易水道が完成し、ようやく風呂水運びから解放されました。和昭さんは酪農に将来性を感じ、中学を卒業すると望月



写真① 北沢さんの牛舎
(1969年築、撮影：2017年)

高原牧場で研修を受け、酪農の拡大を目指しました。畜舎を建て（写真①）乳牛六頭を飼育、その収入は勤め人の給料を超えていたそうです。

国の方針で、一九七二年にキグタシ開拓農業協同組合は解散されました。解散時には農家数は四戸になっており、開拓生活が大変だったことが窺えます。解散式は大徳原と共同で開催され、和昭さんが解散宣言を行いました。

キグタシ農業公社牧場（一九七五～二〇〇五）

一九七二年頃から、世界的な天候不順による家畜飼料の不足に加え、一九七三年の第一次オイルショックにより、酪農家および乳牛が大幅に減少しました。それに對し、国、生乳生産者団体及び乳業社は、生乳不足を補うために、生乳・乳製品の価格政策及び増産計画を、推進することになりました。

南入が大規模酪農の候補地となり、一九七五年に「キグタシ農業公社牧場」が発足しました。事業は五か年計画で、総事業費は二億五千七百万円、主な事業は、大型機械による大規模な牧草地の造成と、畜舎の建築でした。五戸の農家が国から運営費用の借入をし、



写真② キグタシ公社牧場
(1988年、提供：上村秀一さん)

一戸三〇頭の乳牛飼育を目標としてスタートしましたが、翌年一戸減って四戸となりました。（写真②）傾斜地のため、造成時の除石により、雨水で表面土

が流失し痩せてしまうこと、他所では年三回行なえる牧草の刈取りが、寒冷地のため二回しかできず、他所から牧草を買い入れるなど、南入ならではの困難がありました。一九八二年には、牛群検定事業（生産性を上げるために、個々の乳牛を分析して最適な飼育をはかる）が実施されるなど、意欲的な牧場運営もされました。

酪農が全国的に振興・拡大された結果、一九八〇年には生乳生産が過剰になり、生産計画を超えた生乳は、食紅を混ぜて廃棄せざるを得なかつたりと、辛い思いもしてきました。

和昭さんは、農業経営コンサルタントに営業分析を依頼、合理化を計り借入を完済しました。一方国の農家への貸付を引き継いだ上伊那農協では、二〇〇〇年代半ばになると、他の農家は返済不可能と判断、負債として整理を始めました。しかし、借入は農家相互の連帯保証であったため、公社牧場のすべての農地山林は一般企業に売却されました。

農協が、技術指導だけでなく、経営指導もしてくれていたなら、と和昭さん。今は二戸となった南入、標高千メートルを超える北斜面の冬の寒さは厳しく、ひとたび雪が降れば、急坂の多い生活道路の除雪は大きな負担になっています。

昨年は、毎日のように熊による被害がニュースになりました。駒ヶ根市でも、時折熊出没を知らせるページング放送が聞こえてきました。東伊那では目撃情報は無いものの、山林のそばに暮らすため、外を歩くのをためらうようになりました。日頃の外歩きはもちろん、春の山菜取りや秋の野の花鑑賞にも出かけず仕舞いでした。車での移動ばかりになってしまい、健康面が心配です。原因は色々言われていますが、熊も人間と同じ生き物、うまく共存できないものではないでしょうか。（久保田たつ子）

編集の窓

連絡先	赤穂公民館	TEL.83-4060
	中沢公民館	TEL.83-5125
	東伊那公民館	TEL.82-4664
編集・発行	編集／駒ヶ根市公民館報編集委員会 発行／駒ヶ根市公民館協議会 印刷／株式会社宮澤印刷	